

(2) フォークカトリシズムの場合

フランスのルルドやポルトガルのファティマのように、ブラジルでも聖母マリアが出現したとされる場所や聖母を祀る教会が巡礼地になっている。聖母をはじめ諸聖人は民衆の素朴な信仰を集め、聖なるものへの献身が現世利益的な返礼をもたらすと信じられている。複雑な經典的議論に根差さない、こうしたカトリック信仰の在り方をフォークカトリシズムと呼ぶ。本号と次号ではフォークカトリシズム的な信仰から天理教への改宗事例を眺めてみたい。

筆者は調査を始めるにあたり、マリア信仰の根強いブラジルでは、天理教教祖をマリアのアナロジーとして捉える信者が多いのではないかと想像していた。母性というレベルでマリアと教祖に連続性があるからだ。しかし、インタビューではそのように語る信者は一人しかいなかった。それはまさに「オヤサマは日本に現れた聖母マリアだ」というものである。インタビューでは、カトリック信仰を背景とした土壌から入信した14名のうち、聖書の聖句が意識的に語られたのは前号までに示した2人の事例のみだった。他の人々は、フォークカトリシズム的な信仰からの入信とみられるが、このような人々の間で最も強調されるのはプロメッサ（願掛け）と願いが叶った喜びの表明である献身的態度である。聖人へのプロメッサのようにオヤサマに願掛けしたと語る事例は少なくない。

アウシーナは、33歳の女性で2児の母である。母親が背骨を病んで20日間床についた。知人の薦めで教会長に「おさづけ」を取り次いでもらったところ快癒した。それがきっかけとなり、彼女は父母と共に家族で入信した。その後、彼女の夫も教会へ参拝に行くようになった。長男が3歳になったとき細菌性の脳膜炎を煩った。彼女はそれ以来天理教への信仰が深まったという。

その時、子供は10日間入院しました。私はシュウヨウカイに行くことをオヤサマにプロメッサしていたのですが、まだ行ってなかったのが次の年に行くことと改めてプロメッサしました。長男が発病して6カ月目に次男も脳膜炎になりました。医者には目が見えなくなるか痴呆症になってしまうと言われました。でも神様のおかげで子供は盲目にも痴呆症にもなりません。今、子供は元気に学校に通っています。

子供たちが病気になったとき、彼女は天理教とカトリックの両方の教会に通い、聖人とオヤサマの両方に病気の快復をお願いしていたという。フォークカトリシズムの文脈では、目を患ったら聖ルジーア（光の聖母）、結婚願望を叶えるには聖アントニオ（子供のイエスを抱いた聖人）にプロメッサするのがいいとされている。聖人ごとに「守護」が異なると考えられているのである。その頃の彼女にとってオヤサマはなんでも守護してくださる聖人というような感覚だったようである。このような信仰は日本でも見られる民衆宗教の一つのあり方である。それは、神社で願掛けを行い、願いを成就させるために何らかの犠牲を払うというもので、結果として神々との互酬的な取り成しを求める。プロメッサもそれに近いが、願いが成就すればそれ

を「支払う」という前提は、事前に試練を課することが期待される日本の願掛けと異なっている。なお、願い成就の際に返礼することをポルトガル語では「プロメッサを支払う (pagar a promessa)」と表現する。

さて、当初アウシーナにとって天理教を信仰するのは息子の病気を治すためであり、修養会に行くことはグラッサ（お陰）をいただくためのプロメッサだった。彼女の父は次男が発病してから2年後に死亡したが、病床の父が彼女に「孫たちには長生きしてもらいたいから、自分の命を捧げるとプロメッサした」と語ったという。彼女は「子供の病気が良くなったのは、父がそのようなプロメッサをしたからで、オヤサマがそれを受け止めてくださった。だからオヤサマは実際に生きている」と語る。このように彼女の語りにはプロメッサが強調されている。フォークカトリシズム的なプロメッサの信仰という連続性において、彼女は天理教の信仰を語るのである。

しかし、彼女のような入信パターンに属する人たちの多くは、入信後それまでのプロメッサのあり方を否定するようになっている。

天理教では直接神様にお祈りをするんです。神様に直接自分の心を掃除できるようにお願いするんです。カトリックでは聖母マリアや聖人に父なる神様から何か頂けるようにお願いするんです。

主人の病気がきっかけで入信した50歳代女性のセヴェリノも「カトリックでは聖人をお願いするんですが、本当は直接神様にお願ひしないといけなかったんです」と語っている。彼女らにとってカトリックと天理教の違いは神への直接的な祈りにある。また、グラッサを頂戴するという受動的な信仰と自己変革を求める主体的な信仰にある。つまり、ここでみられるフォークカトリシズムからの入信事例は、多神教的な聖人信仰から一神教を要とする信仰への変化、そして信者としての「個」の発見と自覚を示している。

カトリシズムでは、19世紀にフォークカトリシズムを廃して經典的カトリシズムを強調し、ローマ法王庁の元で中央集権化されるローマ化が進められた。しかし、筆者の調査対象者で聖書の言葉を引用したり解釈したりする人の割合が圧倒的に少なかったということは、ブラジルでのローマ化は成功していないということになる。これは一神教的な信仰のあり方がブラジルに定着していないことを意味する。

近年のペンテコスタリズムの急成長は、従来のカトリシズムが成し得なかった一神教的な信仰を広めている。このような状況において、天理教もプロテスタント教会と同様に、多神教的なカトリシズムの宗教的風土を一神教化しているといえることができる。多神教から一神教への転換を「プロテスタント化」と呼ぶとするならば、ブラジルにおける天理教は、まさにプロテスタント化の一翼を担っていることになる。その特徴は特にフォークカトリシズムから天理教への入信事例で確認することができる。このことは逆に、天理教がブラジルで一神教的な宗教として受け入れられていることを示しているのである。